これも豆の仲間？

社会福祉法人しらゆり会　しらゆり保育園（島根県松江市）　［５歳児］

１０月に種蒔きをして育ててきたスナップエンドウとソラマメを収穫し、よく観たり、触れたり、味わったりした。また、スナップエンドウやソラマメを栽培したことで、園の裏庭にあるカラスノエンドウに気付いたり、大豆、枝豆、豆もやしなど、いろいろな豆を集めて栽培したりして、さらに“豆”への興味が深まっていた。

【レンゲ】豆ができた　→　豆の仲間

５月のある日、散歩に出た子どもたちは、レンゲの花を見つけた。

（子）「ピーピー豆（カラスノエンドウ）と同じ形の葉っぱだ！」
（保）「そうだね。よく気がついたねぇ」
（子）「花びらも似てるよ」
（子）「もしかして、これも豆の仲間かな？」
（保）「どうやったら豆の仲間って分かると思う？」
（子）「本当に豆ができるかずっと見てればいい」
（子）「そうしよう」

レンゲの花を選んで“あんちゃん”と“ももちゃん”という名前を付けて観察。数日後･･･

（子）「豆ができてる。やっぱり豆の仲間なんだ」

教育的支え
豆の仲間であるかないかを、子ども自身が考え、子どもなりの答えを導き出せるように関わり、興味を広げていくようにした。

【カタバミ】豆ができた　→　豆の仲間

（子）「花のつぼみもピーピー豆と形が似てるよ。きっと豆の仲間だよ」
（子）「黄色い花の所に、豆ができてる。きっと豆の仲間だ」
（子）「すごい。これも豆の仲間なんだね」

【アカツメクサ】豆ができない　→　豆の仲間ではない

（子）「アカツメクサは、ピーピー豆と同じ形の葉っぱだ
（子）「いつまでたっても豆ができないね」
（子）「豆はできなかったね。豆の仲間じゃないんだ」

教育的支え
子どもは、豆そのものが「出来る」「出来ない」によって、豆の仲間かどうかを判断している。アカツメクサもマメ科ではあるが、子どもたちの導き出した基準を尊重する。

【藤の花】豆ができた　→　豆の仲間

園庭の砂場の上の藤にはあまり豆ができていなかったが、お泊まり保育の時「青少年の家」で藤棚を見付け、たくさん豆ができているのを見た。

（子）「どうして保育園のは、できないんだろう」
（子）「年をとっているから？」
（子）「お花の所から、豆ができてる！！」
（子）「やっぱりお花が豆になったんだね！」
（子）「下に何か落ちてる！小さい豆だ！」
（保）「どうして落ちたのかな？」
（子）「枯れちゃったのかな？」
（子）「元気がなくなったのかも」
（子）「でも、豆ができたから豆の仲間だ」

教育的支え
どうして小さい豆が落ちてしまうのか子どもならではの答えに留め、課題として残しておく。

＜考察＞

豆に興味・関心をもつ中、葉・花・豆の形などを詳しく比較し観察することで、「科学する心」の深まりが見られるようになってきた。この深まりを支えたのは、事前の予備知識として保育者が調べておいたこと（豆の仲間）や、園内外の環境のどこにそれらがあるかを把握していたことが、大切な要素になったと考える。
（園庭や裏庭の藤・カラスノエンドウ・アカツメクサ、スナップエンドウやソラマメの栽培、地域の草花など）

みどころ

子どもたちは、栽培を通じて“豆”への興味・関心が高まっていたことから、日常的に関わっている身近な環境にある“豆に似た草花”に関心が向いていきました。自分たちの経験や知っていることを基に予想したり、調べる手立てを考えたりしながら、疑問に思ったことを追求しています。そして、一つの結果を得たことから、他はどうだろうかと、また調べたくなる気持ちが膨らみ、「科学する心」が刺激されていることが分かります。